

研究生活を振り返って

中野 毅

Looking Back Upon My Thirty-Five Years as a Sociologist of
Religion

NAKANO Tsuyoshi

2018年3月末日をもって、私は創価大学での教員生活を何とか無事に終え、定年退職します。35年間の勤務でしたが、長いようでもあり、あっという間の時間でもありました。この機会に、私が宗教社会学、広くは宗教学・比較宗教学という分野に入り込んだ経緯、その研究生活で経験し、考えたことを振り返ってみたいと思います。

【言論出版問題】

私が宗教学、なканずく宗教社会学の重要性を認識し、その道に進もうと決めた大きな契機は、1969（昭44）年11月頃から始まった、いわゆる「言論出版問題」でした。

1967（昭42）年に一浪して東京大学教養部理科Ⅱ類に入学した私は、1968年頃から始まった70年安保改定反対闘争や大学立法反対運動から全共闘運動の発展、安田講堂封鎖へと続く「東大紛争」を経験しました。駒場キャンパスで連日繰り広げられたクラス討論や民青、全共闘、他の諸党派との論争の中で、自分たちも独自の学生運動組織をつくって「第三の道」を模索したい

という思いが強まり、同様の問題意識をもつ創価学会学生部員の有志と共に
によって「新学生同盟」が1969年10月19日に結成されました。この運動は仏
教理念、とくに創価学会の人間革命の理念を社会的政治的な思想として展開
し、公明党も含む政党主体の政治運動や議会制民主主義ではすくい上げられ
ない「草の根民主主義」を実現すること等を目指したものでした。必然的に
戦後の自民党一党支配・社会党とのなれ合い55年体制への批判、また対米従
属の日米安保体制の見直しを主張し、また当時進行しつつあった文部省による
大学管理強化策に反対する声明を出したりしました（大学に対する文部省
の締め付けや管理体制の強化は、その後着々と進み、今日に至っていること
はご存じの通りです）。このような反政府的な主張、自民党支配に対する批
判などを強めたことも一因だろうと思いますが、この年の末頃から創価学会
の「言論出版問題」「政教分離問題」が次第に大きな社会問題になり始めま
した。

「言論出版問題」とは、私の理解では、創価学会を批判的に描いた藤原弘
達著『創価学会を斬る』の出版を阻止しようとして、当時の竹入義勝・公明
党委員長が田中角栄・自民党幹事長に依頼し、田中が著者や出版社に圧力を
かけた事件でした。一見すると有力な私人間の交渉ですが、竹入も田中も国
権の最高機関である国会の議員であるので、国家権力を動かして特定の宗教
団体の利益のために動いたことになり、憲法で定めた「政教分離原則」に違
反する恐れがないわけではありませんでした。この問題を創価学会の公明党
支援活動、一般的には宗教団体の政治活動が憲法上の「政教分離違反」だと、
日本共産党が機関紙「赤旗」で大々的に取り上げ、やがて他のメディアもキ
ャンプを張るなど大きな社会問題となった一連の出来事です。公明党も
当時は宗教政党という看板や性格を強く残していましたが、反自民の中道革
新政権をめざしており、また1969年12月の衆院選では47議席を獲得するなど
自民党政権にとって大きな脅威となりつつありました。これらの諸要因が事
件の背景にあったと考えています。

このような社会からの批判に対して、創価学会は翌1970年5月3日の第33回
本部総会で「広宣流布とは（政治運動に偏らない）壮大な文化運動である」
との新路線を鮮明にし、今後は過度な批判拒否体質を改め、日蓮正宗大石寺

に建設中の本門戒壇・正本堂は「民衆立」であると、世間が批判していた「国立戒壇論」を改めて、かつ事実上否定して沈静化させ、さらに公明党議員の創価学会役職兼務を廃して、公明党は自立した国民政党として活動し、創価学会はその支援団体の一つである、会員の政党支持は原則自由である等々の新たな方向性を打ち出して今日に至ったのです。

このような出来事を経験した私は、国家や政治と宗教の関係をより深く学問的に探求する必要性を強く感じ、東京大学の教養学部から専門学部に進学するに当たり、理系から文系に転身することを真剣に考え始めました。理系に興味を失ったもう一つの経験は、東大紛争の最中にある優れた若手数学者と懇談したことでした。彼はそうした社会や大学内での動きには全く関心がなく、自分の学問的研究のみに没頭することが学者の使命だと傲然と語りました。今思えば共感する面もありますが、当時の私たちは学者・学問の社会的責任とは何かということを強く主張していましたので、その先生の考えに憤りさえ感じたのです。自然科学は社会から浮いてしまうと考えた私は、日本社会や世界の動向をはっきり見据え、コミットしていける自分になりたいという思いから、文学部西洋史学科に進学することを決めました（若干、きれいな事過ぎる言い回しですが、勉強もあまりやらなかったため、数学や物理に自信がなくなり、理系の学問を本格的にやることに躊躇したからでもありました（笑））。

こうして東大紛争も収まって一年半の全学休校が解除となった1970年9月に、私は東京大学文学部西洋史学科に進学しました。西洋近代史を学んで長い歴史的視野から物事を考えたいとの動機でしたが、そこで西洋中世史の大家・堀米庸三先生に出会いました。堀米先生の演習を受講し、そこで邦訳が

1) 原著はフランス語で出版されたが、英訳本（1961年刊）で読んだように記憶している。邦訳は『封建社会』（みすず書房、1973年）が出ている。ブロック（Marc Léopold Benjamin Bloch, 1886年7月6日－1944年6月16日）は、フランスの歴史学者。アナール学派の初期の重要な代表者の1人。ストラスブール大学教授（1936年にパリ大学教授）。ユダヤ系フランス人で、第二次世界大戦が始まると高齢にも関わらず出征し、フランスがナチスに敗北するとレジスタンス運動に参加したが、故郷リヨンにおいてドイツ軍に捕縛され、銃殺刑に処せられた。

出る前のマルク・ブロック『封建社会』(Marc Bloch, *Feudal Society*)¹⁾を輪読しました。西洋中世社会における王権とキリスト教の関係が主要なテーマの一つでした。その演習で、堀米先生が有名な「カノッサの屈辱」のくだりを描いた原文の半頁ほどを解説するのに膨大な歴史的資料をそらで開陳し、それをもとにブロックの所論の誤りを次々に指摘していく姿に、真の学者とは、学問の深遠さとはこういうものか！と感動したことを今でも思い出します。それが学問をやろうと決意した決定的な契機でした。

【井門富二夫先生や東大宗教学との出会い】

こうして文学部西洋史学科の学生として、王権と宗教、国家と宗教の関係を西洋中世から学び始めた時に、井門富二夫先生と出会ったのです。言論出版問題の最中に、赤旗や一般紙の政治的な論争、批判と異なり、宗教学や社会学の観点から、井門先生が種々発言されていたことは知っていました。当時は津田塾大学教授だったその井門先生が、東京大学文学部宗教学科の非常勤講師として東大に出講されて「世俗社会の宗教」という科目の講義をされていたのです。政治的な論争を越えて客観的にこの問題を考えたいと思っていた私は、早速、受講しました。近代化された社会は「世俗的」な法律や手段によって運営される社会であり、かつての国教のように特権的な地位を占める宗教教団は存立し得ず、すべての宗教に「自由」が保障される社会です。それを井門先生は「政教分離社会」とも称していました。この社会においては、もはや一つの社会全体の成員を一つの宗教で包摂することはできず、国教制によって上からの権威を主張するチャーチ型宗教も、成員の自発的で平等な参加によって成立するセクト型宗教も、ともに主張の正当性を競争し合うデノミネーション型の宗教になるとの主張でした。また近代社会は機能分化が高度に進展する社会でもあり、宗教も「制度宗教」「文化宗教」「組織宗教」「個人宗教」へと分化していくという独自の宗教機能分化論も展開していきました。

講義内容には大いに勉強になりました。が、驚いたのはその講義スタイルでした。井門先生の「しゃべり」はノートも取れないほど早く、大量の話を

されるのです。ついには小型のテープレコーダーを持ち込んで録音を許してもらい、何度も聞き直しながら分厚い講義ノートにまとめたことを思い出します。

このことがきっかけで私は宗教学、なかんずく宗教社会学を志しました。文学部宗教学科の研究室は西洋史学科のすぐ側に合ったこともあり、宗教学研究室に頻繁に訪れて小口偉一、柳川啓一、脇本平也、田丸徳善などの諸先生から親しく教えることができました。柳川先生には、ハワイ日系人宗教調査に連れていってもらうことなどで大きく啓蒙されましたが、この点は後に記します。なかでも小口偉一先生は、当時、東大宗教学科の主任教授であり大先生だったのですが、ある日、本郷三丁目の裏地にある料亭のようなところで食事をご馳走になりました。学部生にとっては破格の経験でしたが、その席で「中野君は創価学会員なんだろう？私はね、戸田君とは昵懇の中だったんだよ」と話されて、さらに驚きました。小口先生は実は戦後発展した創価学会を研究した最初の宗教学者でもあり、著書もあります。その研究の必要性から戸田城聖・創価学会第二代会長に何度も面談し、富士山麓の日蓮正宗総本山大石寺で行われていた夏期講習会にも呼ばれて見学したとのことでした。それらの経験や戸田会長の人柄（ごつくばらんな性格で酒飲みだったことなど）を縷々伺うことができました。

こうして政教分離問題のみでなく、創価学会運動の学問的研究について知見を広めていく中で、本気で宗教学・宗教社会学をやろうと決意したのです。そこで東京大学の大学院を目指したのですが、その試験を間近にひかえた1973（昭48）年6月、父・政則が53歳で病没しました。3月に胃の調子がおかしいと入院した病院で「胃癌」であることが分かり、やがて肝臓に転移してあっという間に亡くなってしまいました。大きな衝撃でした。

東大大学院の入試にも落ち、学問への道も一時諦め駆けた時に、筑波大学に移られた井門先生から同大学院を受験してみないかというお誘いを受け、再び決意して受験し、進学することができました。井門先生との出会いと薫陶がなければ、私のその後の人生はありませんでした。また、この進学に関しては創価大学創立者の池田大作先生に様々な暖かい御配慮をいただきました。このご恩は決して忘れません。

こうして筑波大学大学院に進み、宗教学を本格的に勉強し始めました。筑波では他にもバルト神学の大家・小川圭治先生からバルトやハイデッガーを学び、川崎信定先生からは仏教学も学びました。もちろん井門先生の研究から多くを学びました。先生の研究領域、その業績は多岐かつ膨大で、宗教行政や高等教育論などにも及びます。宗教学に絞ってもエリアーデやキタガワなど、当時最先端のアメリカ宗教学を、またパーソンズの構造－機能主義社会学、英オックスフォード大学のウィルソンのセクト論、世俗化論などを紹介していただきました。これらの仕事をとおして、欧米との学問的交流を発展させた井門先生は、戦後日本の宗教社会学の基盤をつくり、また国際派として活躍されたお一人でした。

井門先生が手掛けた行政と関係する仕事は、「教団組織論」であり、それを宗教行政にいかした「啓蒙の宗教学」を実践したことです。現在の「実践宗教学」の源流です。浄土真宗の教団体制などを事例に、教義の解釈や指導を担う宗教的権威と、法人事務や経営を担う俗的機能とを組織的に分離し、前者を統理や会長として宗学・教学の部門を率いて信徒の信仰を導く宗教的機能を担う。後者は理事長を代表として理事会や事務局を率いて教団の経営を担う部門とし、両者を統合する機能を宗議会や総務会にもたせるという主張でした。このような指導を受けて組織改革を行った新宗教教団は多数ありました。創価学会もその一つです。

【ウィルソン先生との出会い】

私の研究生活の核となった貴重な経験は、イギリスのオックスフォード大学での在外研究です。1987年4月から一年間、同大学オール・ソールズ・カレッジ (All Souls College) の正式な Visiting Fellow (客員研究員) として家族と共に滞在することができました。詳細については「オックスフォード報告」(『ソシオロジカ』第14巻2号, 1990年3月) にまとめてあります²⁾。

2) 下記の創価大学機関リポジトリからダウンロードできます。

https://soka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_

このカレッジ（学寮）はオックスフォード大学においても特異なカレッジであり、学生はいなくて研究者（Fellow）のみが住み込んで生活する場でもありました。ここのフェローになることは簡単ではありませんが、正式のVisiting Fellowになることも顕著な研究業績と経歴のある大学教授であることが通例でした。しかし私は、文学部の助教授になったばかりであり、若手の研究者でありながらVisiting Fellowになれたのは、まさにブライアン・ウィルソン（Bryan Wilson）教授が副学寮長（Sub Warden）としておられたからでした。このカレッジの学寮長（Warden）はオックスフォード大学の総長であることが慣例であり、しかも総長は学者ではなく著名な元政治家や貴族が名誉職的に就任していましたから、副学寮長としてのウィルソン教授は実質的な学寮長でした。その立場でオール・ソールズ・カレッジにも新風を吹き込もうと若手のVisiting Fellowを入れるように計らってくれたのでした。

ウィルソン先生との出会いは、井門富二夫先生から彼の著書を邦訳出版することを勧められたことがきっかけでした³⁾。この邦訳を進めているさなか、国際宗教社会学会（International Society for the Sociology of Religion; ISSR）東京大会（1978年12月）が開催され、当時、その会長だったウィルソン先生が初来日しました。この時に翻訳の打ち合わせを兼ねてウィルソン先生と初めてお会いしました。最初の印象はイギリス人学者らしく気むずかしい印象でしたが、親しくなるにつれ、とても優しく教育熱心な紳士であることも分かってきました。

この学会は当初はフランスのカトリック教会が主導して、戦後のフランスなど欧米諸国でカトリック教徒が減少しだした社会的要因を研究するために結成されました。加入者も従ってヨーロッパのカトリック系社会学者が中心でしたが、ウィルソン先生が会長になってからは、より客観的で学術的な学会となることをめざし、また幅広い国々の宗教学者、宗教社会学者に参加し

view_main_item_detail&item_id=36352&item_no=1&page_id=13&block_id=21

3) ブライアン・ウィルソン『現代宗教の変容』（井門富二夫・中野毅訳）ヨルダン社、1979年。

てもらいたいとアジアでも大会を開いたのです。この大会で若手の研究者も日本の宗教について発表することになり、そのチームの一員として私も参加しました。それ以来、ヨーロッパの様々な大学都市で2年ごとに開かれる学術大会に何度も参加し、研究者とのネットワークを広げることができたことも大きな経験でした。私や妻にとって姉御のような存在になったアイリーン・バーカー教授（ロンドン大学LSE）や兄貴分のジェイムズ・ベックフォード教授（ウォーリック大学）など親しい方々との交流は私の学問的展開にとって大きな収穫でした。ヨーロッパ各地、遠くはメキシコシティー郊外で開かれた、それぞれの大会には主として東京大学の柳川啓一先生、島菌進さん、また國學院大学の阿部美哉先生と旅をした楽しい思い出も沢山ありますが、それは稿を改めて書くことにします。

学問の上でウィルソン先生から学んだ点は、今日に至るまでの私の宗教社会学の骨格をなしています。井門先生から概要を学んでいた「社会の近代化と世俗化」についての理論を更に厳密に学び、世俗化とは全体社会体系が世俗的合理的原理によって運営されるようになる社会的過程だが、だからと言って社会の完全な非宗教化や「宗教の衰退」を意味するのではない。公的領域から宗教は撤退するが、種々のセクト型に変容しつつ私的領域の重要な要素として存続し続けるという点も、その一つです。セクトの諸類型やセクトの転移などの理論も示唆的でした。なかでも宗教社会学の方法論、方法的態度としての「共感的客観視」(sympathetic detachment) という主張は極めて参考になりました。ウィルソンはウェーバーの理論を多用しつつも、その研究方法は古典的な実証主義で、様々なセクトや新宗教運動の現地調査、信徒への聞き取り (depth interview) などを重ねて全体像を捉えようとします。そのためには信徒や教理への限らない共感的理解 (sympathetic understanding) が必要だが、その上で社会学的距離をとって客観的に捉えていくというものです。これらの理論や方法論については、前述のSISR東京大会終了後の1979年1月に5回の連続講演をしてもらい出版することができ

4) Bryan Wilson, *Religion in Sociological Perspective*, Oxford University Press, 1982 (中野毅・栗原淑江訳『宗教の社会学』法政大学出版社, 2002年)。

ました⁴⁾。

ウィルソン先生は日本の宗教、また創価学会にも早くから関心を持たれており、この来日の折に創価学会本部を訪れて池田大作会長（当時）と会談されました。その時の合意から両者の対談が始まり、来日するたびに、またヨーロッパの各地で会合・対談が進み、最終的には出版されることになりました⁵⁾。当代一流の宗教社会学者と池田先生の対談は、様々な出版の中でも読み応えのある対談集であると思います。

さらにヨーロッパ、特にイギリスでの創価学会員についての社会学的研究を、ベルギーのカトリック・ルーバン大学のカレル・ドベラーレ教授と共同で進め発刊されました⁶⁾。上述の「客観的共感」を駆使して、欧米における創価学会研究のモデルになる研究と言え、邦訳を進めていく際に、会員でない社会学者がここまで創価学会運動の世界、その担い手たちの内面を理解しているのかと感動したものでした。宗教運動に対する社会学的研究の極めて重要な方法的態度が、この客観的共感であると思います。運動の理念や信徒たちへの限りない共感と彼らの立場からの理解を深めつつ、しかし対象から一步距離を置いて、より広い社会的文脈、視野の中に位置づけていく作業、これはいかなる社会におけるすべての宗教の研究において重要だと考えています。

1997年秋の二ヶ月間、ウィルソン先生を創価大学文学部客員教授として招聘することができ、ゼミや講義、講演をしていただくことができました。これまでのご貢献に対するお礼のつもりでお招きしましたが、この滞在が先生の最後の来日となりました。学生への講演では、「レジリアントな精神」の重要性、ディベートや対話の重要性とともに「一人になる時間」の大切さを説くなど、学生・教員への暖かくも鋭い指摘を様々にしてくださったことは忘れられない思い出です。ウィルソン先生は2004年10月9日に逝去されました。

5) 池田大作、ブライアン・ウィルソン『社会と宗教』（上下）講談社、1985年。

6) Bryan Wilson & Karel Dobbelaere, *A Time to Chant: The Soka Gakkai Buddhists in Britain*, Clarendon Press, Oxford, 1994（中野毅訳『タイム・トゥ・チャントーイギリス創価学会の社会学的考察』紀伊國屋書店、1997年）。

たが、この来学時も含め、その思い出での数々を下記のインターネット・サイトに掲載してあります。

In Memoriam: Dr. Bryan Wilson <http://nakanozemi.fc2web.com/>

私の研究生活において大きな影響を受けた出来事には、他にも宗教社会学研究会での経験と西山茂先生との出会い、東大宗教学研究室によるハワイ日系人宗教調査での柳川啓一先生や井上順孝氏との交流、島藺進氏との友情、前述のISSRで共に各地を訪れた阿部美哉先生との思い出、韓国の曹溪宗立・東国大学訪問における経験、東洋哲学研究所のことや日蓮正宗との対立など多数あります。それらは稿を改めて書くことにします。

創価大学への期待と提言

創価大学を去るに当たって、上記のような長年にわたる研究生活を踏まえて創価大学への希望を記して終えたいと思います。

1. グローカルな視点と運営を：原点を忘れずに

現在、創価大学はグローバル・プログラムを懸命に実行し、世界に冠たる大学になるよう執行部はじめ皆様が尽力されていますことは喜ばしいことです。その際に十分に留意して欲しい点は、グローバルな視野をもちつつ、ローカルな、すなわち自分たちの依って立つ思想的人的基盤にしっかり向き合い、それを明確に捉えつつ、さらに普遍化して、他者に理解しうる言語で表明することが大切だと思います。グローバル (global) とローカル (local) を結合してグローカル (gloacl) という用語を発明したのは、ウィルソン先生の教え子の一人であるピッツバーグ大学のロバートソン教授でしたが、そのグローカルな視点や立場がグローバル化時代には重要になります。

その点から本学の問題を振り返れば、まず創立の原点を常に振り返り、何のための大学なのか、社会や世界に何を訴え、貢献していく大学なのかを考え続けていって欲しいと願っています。それには、創立者による下記の講演に時々立ち返ることが大切ではないかと思います。

第三回入学式 1973年4月9日「創造的人間たれ」

第二回滝山際 1973年7月13日「スコラ哲学と現代文明」

これらの講演は大学の起源を中世ヨーロッパに遡って、ギルド＝ユニベルシタスとして始まったことから説き起こし、大学は学問を通して真理を探求しようと自発的に結合した人々の集団であることから、大学の自治と学問の自由の重要性を訴えています。さらに西洋中世の重要な神学者であるトマス・アキナスやドン・スコウトスなどにも言及して、理性と信仰は対立することもあると明解に論じ、それら思想的宗教的対立を乗り越えた新しい大学を造ろうと、創立の目的と意義を述べています。批判精神と気概にみちた素晴らしい講演です。

2. 思想的源流を明確にし、かつ普遍化

いうまでもなく創価大学は宗教団体・創価学会が母体となって設立されました。近代日本において発展した新宗教教団が大学まで設立したのは、西の天理大学と日本福祉大学、そして本学しかありません。それだけでも素晴らしいことですが、現代において更に発展していくためには、まず法華経などの大乗仏教の基本思想、日蓮仏法、そして牧口常三郎の教育思想および創価学会の宗教理念を基盤にしていることをもっと明確にし、それらについて講義科目をそろえて教育することが良いと考えています。多くのミッション系大学では必修科目に「キリスト教入門」「キリスト教思想」などを置いているところも少なくありません。創価学会の教学部の方が非常勤講師として教えることも良いでしょう。また本部職員になる学生にはしっかり教えることが必要でしょう。

と同時に他方では、一般の高等教育機関である創価大学は、上記のセクト性を越えた一般的教育もする必要もあります。そのためには宗教学、比較宗教学、宗教社会学などの科目を重視して、世界の諸宗教の歴史や教義、社会や政治との関係なども十分に研究・教育しなければなりません。創価学会の宗教理念を基盤としつつも、それらを越えた普遍的な思想的立場を追求していくことも求められているのです。事例としてはアメリカのワシントンDCにあるジョージタウン大学や日本の上智大学の戦略を学ぶことも有益だと思います。

一つのあり方として、より広い大乘仏教的な思想的立場を鮮明にしていくことも望ましいと考えます。何が大乘仏教的立場なのかは議論の余地がありますが、その核心とは「慈悲の精神」と言えます。その精神を私は以下のように考えています。全ての人々が、その個性を華咲かせ、かつ自立した主体として自他共に幸せになることを理想とし、人種や民族、出身が異なる人々＝他者への理解と共感の力を深め、多様性を認めて相互に尊重しあえる寛容な共生社会、世界の構築のために生きることです。特に弱者や苦難に遭っている人々へ寄り添い、「他人の不幸の上に、自分の幸福を追求するな」という創立者の教えにつながる生き方ではないでしょうか。

そのような「慈悲の精神」が大学の運営の基底にながれ、学生の人格形成に反映していくことを願っています。本学の建学の精神や種々掲げられている教育目標の根底に脈々と流れているのも、この精神であると思います。教職員がこの精神を深く自覚し、実践していけば、巣立っていく学生にも自ら身についていくことと思います。

3. 基盤となる社会層を直視

もう一つのグローバルな観点とは、どのような人々によって担われ、支援されている大学かを、社会学的に怜悯に分析して運営していくことです。いうまでもなく大多数の学生は創価学会員の子弟です。これらの学生、父母たちが日本社会のどのような階層的位置の人々かをよく考え、必要な経済的学問的支援の仕組みを充実していったと欲しいと願います。

他方では、もちろん、創価学会の子弟以外の若者が創価大学に魅力を感じて入学してくるようになることも重要です。いつまでも創価学会に依存しているわけにはいかなくなるでしょう。現在は、そのための努力をグローバル化していくことで達成していこうとしているのですが、その場合も1.で記した基本的な思想的や、社会的基盤をはっきり見つけながら展開して欲しいと願っています。

4. 教員の使命、文学部の使命

大学教員はただの教育実務家ではなく「知識人」であり、なかでも文学部

はカントのいう「哲学部」であって、大学の思想的学問的な中心であることを忘れないで欲しいと願っています。アメリカの社会学者ミルズや近年ではパレスチナ系アメリカ人の批評家サイドが語っているように⁷⁾、大学の教員は単なる教育者、専門的知識の伝授者でもなければ、自分の研究領域や専門領域に特化した専門家であってもならない。もちろん、その両者の資格と能力は十分に深くなければなりません、加えて「知識人」としての責任も負っていることを忘れてはならないと思います。知識人とはその専門的知識や批判的思考力、分析能力を生かして、真理や正義などの普遍的価値の代弁者の一人として、いかなる権力や権威を恐れずに、公共的課題の公共的論議に積極的に参加し、コミットする者であると考えます。

創価大学は、そのような意味での知識人の集合体であって欲しいし、優れた知的集団であって欲しい。そしてその潜在能力を現代世界が直面する諸課題の解決のために生かして欲しい。公明党の政策立案にも貢献して欲しいし、何よりもまた、母体である創価学会・SGIの更なる発展のために、その宗教的理念を現代的な普遍性をもったものとして展開すること、かつハバマスが主張する公共的理性を発揮して、その宗教的言語を世俗的一般言語に「翻訳」して世界に発信し、市民的公共圏における熟議をリードしていく重要な役目をも担っていくことを期待いたします⁸⁾。

以上、徒然なるままに記しましたが、長年お世話になった創価大学の創立者、教職員の皆様に心から感謝申し上げます。また今後のさらなる発展と学生諸君から有為な人材が陸続と排出されますことを願っております。

2017年11月18日

7) ミルズ『社会学的想像力』紀伊國屋書店、1965年、「付録・知的職人論」。サイド『知識人とは何か』平凡社、1995年。

8) Jurgen Habermas, “‘THE POLITICAL’ The Rational Meaning of a Questionable Inheritance of Political Theology”, in E. Mendieta & J. Vanantwerpen (eds.), *The Power of Religion in the Public Sphere*, Columbia UP, 2011, pp.25-28 (邦訳『公共圏に挑戦する宗教』岩波書店、2014年25-31頁)。

